

「キリスト教と福祉—新型コロナウイルスの救い」を拝読しました。大変立派な内容で、説得力があります。拙著も引用していただき、ありがとうございます。

既成のキリスト教会は、日本社会の入れ子状態の中で、その存在を保っています。それでも、指摘されているように、キリスト教が社会福祉に貢献してきたことも事実です。今後も、そうだと思います。

「路上生活者」「LGBT」「統合失調者」「被災者」などといった用語で言い表されている人間存在へのまなざしは、維持可能な社会の基盤となります。しかし、これらの用語は常に、これらの人々を他者化する機能も果たしており、それにより、矛盾した現行の社会システムを保持する側面を抱えています。入門(1)で言及したエリック・ホッファーが述べているように、地べたを這いずり回っている人々を生かせば、いろいろなことができそうです。彼ら・彼女らがその気になれば、「合衆国を作ることさえできる」と学歴を持たない市井の哲学者ホッファーは述べています。製図が書ける人がいるかもしれません。大工の心得を持った人もいるかもしれません。料理人の腕を持って言える人がいるかもしれません。町の設計ができる人がいるかもしれません。子供の世話ができる人がいるかもしれません。物を運んでくれる人がいるのかもしれませんが。農作業ができる人がいるかもしれません。漁師の資質を持っている人がいるかもしれません。こういう人々がたくさん地べたにいます。

しかし、今の社会では、国会議員、政治家、知事、自治体の長が高学歴者で占められつつあります。「専門家」が横行しています。「専門家」は権力者の決定にお墨付きを与える役割を果たしています。仙台市教育委員会が選任した常任のいじめ調査部会メンバーは、その種の専門家たち(弁護士、医師、大学教員)です。私は、その種の専門家たちに対して、調査部会の場で、論陣を張っています。本当に劣悪で、あくどいですよ。いじめに加担している親、教師たちと組んでいますから。

世の中にはたくさんの専門家たちがいて、こういう世の中を作っています。街並みを見ても、どこへ行っても代り映えのしない建物はまさに、「一級建築士」のなせる業です。長持ちする「でこぼこ」状態の建物という発想がないのです。

また、社会が「専門性」の名の下に細分化され、人と人が分断されています。キリスト教はその分断を補強している側面があります。つまり、人を見下しているのです。

松谷氏や島田氏の指摘は当たっていますが、キリスト教は明治以降、上流階級や富裕層を相手に活動し、国家に追従してきました。日本の近代化を応援してきたのです。「伝道報国」です。無教会派も決してその例外ではありません。一時期、郵便などの通信業務に携わった庶民が一生懸命文書伝道に励んだこともありましたが、日本のキリスト教は、有力者に色目を使ってきました、そうするほうが楽であるし、自己保全につながるからです。その結果、キリスト教ホーム形成が助長され、仲間主義が横行し、おいしいポジションについています。ミッションスクールはまさに、その典型です。どこの馬の骨かわからない存在は、初めから相手にされていないのです。松谷氏や島田氏の指摘は、そういうことを正面から論じていないのではないかと感じます。そういうことを論じれば、出版界からもキリスト教界からも相手にされなくなるリスクがあるからです。上から目線で観察しているからです。

キプリアヌスやディオニュシウスが引用されていましたが、キリスト教を礼賛している古代の指導者たちなので、その文脈に注意を払う必要があります。彼らは、疫病に直面した際、「いかにキリスト教徒たちは、自分勝手な異教徒と比べて素晴らしいか」という観点で、異教徒批判を展開しています。エウセビオスが『教会史』の中でも、疫病に関するキプリアヌスやディオニュシウスの記述を紹介しています。そこにうまく乗ったのが、土井健司氏の論考だと私は思います。困窮者に対する配慮がキリスト教を活気づけ、ローマ帝国内における位置を確固たるものにしたというめでたい論理は、アメリカの社会学者ロドニー・スタークが“The Rise of Christianity: How the Obscure, marginal Jesus Movement became the dominant religious force in a few centuries”においてすでに展開しています。日本語訳があるそうですが、私は日本語訳ではなく原著を読みました。付け加えますが、ロドニー・スタークは社会学者なので、社会現象を類型化して論じています。たとえば、アメリカにおける統一教会(Moonies)の広がりや要因を、肉体的な伝統的、既成の家族の形態を脱した新しい霊的家族という教義に帰しています。違法な献金集めを行っている統一教会の問題性には言及しません。それは、社会学者の仕事ではないからです。

ヘルムート・ケスターのいくつかの著書は私の研究の道具でもあります。引用箇所を原著で確認しました。トラヌス皇帝が何もしなかったわけではありませんが—孤児に学資をあてがっていてもいた—、一部篤志家に頼らざるを得ず、国家規模の福祉の仕組みができていない中で、キリスト教の果たした役割は小さくはありません。キリスト教徒皇帝たちは、福祉を支配力強化のために利用したかもしれません。一石二鳥です。やらないよりは、やったほうがましですが。「慈善」という価値観そのものは、やはりユダヤ教の遺産であったとも思います。もっと広く言えば、古代オリエント世界の価値観とでも言うべきでしょうか。

とにかく、岩村先生の原稿はもっと他にも知られたほうがいいような立派な内容だと思います。ありがとうございました。